

## 論文の内容の要旨

論文題目 異世代交流から見たケア拠点の建築計画に関する研究  
-共生ケア施設における高齢者・障害者児・子どもの交流事例を通して-

氏 名 江 文 菁

世界の高齢化の加速はとどまることを知らず、超高齢社会の「先進国」である日本の高齢者向け施設や住宅の整備は世界から注目されている。建築計画の研究においても、これらの分野は施設での集団ケアから「地域」というキーワードで建築やまちづくりを考える方向に進んでいる。これはある特定の属性（特に認知症高齢者）をケアするために訓練されたスタッフによる専門的なケアから、「地域」を構成する多様な属性の人による多方面からのケアを重視する流れに沿っているが、ケアされる対象が相変わらず高齢者という単一像であることに疑問を抱く人は少ない。

しかし障害者をはじめとした身体的・知的・精神的弱者は言うに及ばず、保育所の待機児童やシングルマザー、あるいは放課後に児童館で遊ぶ生徒まで、高齢者以外のケアを必要とする人への施設は人数が少ないためか整備が進んでいない。地域によっては、既に施設整備が整った高齢者施設に上記の利用者も対応させようとの対策や、制度に則らない自主的な混合ケアが行われ、これらは「共生ケア」という名称で全国に普及しつつある。

本研究では、「地域は多様な人々が暮らす集合体であり、様々な属性の人が暮らす共生ケア施設は社会像の縮図である」との見地に立ち、よりよい共生ケア施設づくりが将来の豊かな地域生活につながるとの考えのもと、アンケート調査やインタビュー調査、建築計画的な観察調査によって共生ケアの実態を把握する。最終的にはそこで得られる建築的な特徴と利用者の生活の関係を明らかにすることで、まだ始まって間もない共生ケア施設づくりに寄与することを目標とする。

本論文は全5章で構成される。

第1章では、共生ケアの先進事例である富山型デイサービスの発展経緯および制度に関する緩和措置や支援策、さらに関連する既往研究についてまとめた。これまでは、制度や支援によらない自主的な運営であったが、2000年の介護保険法の施行と2003年の富山型デイサービス推進特区の指定により、類似サービスが全国に展開した様子を示した。既往研究でもこのような取り組みが取り上げられてきたが、異世代による「共生ケア」

に着眼点をおくものより、子どもと高齢者による異世代交流の効果が議論されてきたことを整理した。

第2章では、共生ケア実施施設への全国アンケート調査を通して、提供するサービスと、登録利用者像の実態を明らかにした。さらに現地でのインタビュー調査を加え、各都道府県で支援策や補助金の重点は異なるものの、必要な人すべてにケアを届ける、そのために居場所を提供するという理念に相違はないことが分かった。

第3章では、9か所の調査対象施設からにおける行動観察調査から、実際の利用者の属性、滞在時間、滞在場所を明らかにした。

利用者像については、現実には制度利用が大きく影響するため、理念とは異なり高齢者、あるいは障害者に偏る傾向があることが明らかになった。利用者の居住地については、高齢者は施設から3～5km以内に居住しているのに対し、障害者・児はそれよりも広範囲から通う人がおり、身近なところに障害者・児の居場所が不足していることがうかがわれた。しかし、障害者・児の中には通い慣れた場所、慣れている人（スタッフ）など個人によってそれぞれのこだわりがあることも、広範囲利用の原因であると推察された。

滞在時間や場所については、子どもは夏期休暇中に人数が急増することがあり、高齢者と子どもがふれあえる機会は多くなるが、常に一緒にいることは難しいことが分かった。宿泊もする高齢者は寝室に入り、スタッフは他の利用者（高齢者、障害者・児など）をドライブやプールなど外部へ連れ出す行動も見られ、別々に時間を過ごすことも多い。滞在は共用空間であるデイルームにいるのが基本だが、個室を好む人、また個室のベッドでの安静を望む人は長時間にわたり個室に滞在していた。

第4章では、行動観察調査を通して、多様な利用者が共存する施設での交流実態を明らかにした。共生ケアならではの活発な異世代交流が期待されたが、実際には他者とコミュニケーションがとれない利用者もあり、利用者同士の相性も影響して一概に「共生ケア＝異世代交流」の図式にはならない様子が見えた。また、多様な利用者が共存するとスタッフとの区別も難しくなり、利用者が利用者をケアする様子も判明した。暮らしの空間でもある施設では、単に世話をされる立場ではなく、自ら掃除や洗濯物をたたむといった生活行為もあった。

第5章では各章を総括し、共生ケア施設で行われている利用者の交流実態、生活実態から、共生ケアの特徴と将来の可能性についてまとめた。

対人交流が苦手な利用者がある中、スタッフのフォローやケアは不可欠であり、それがスタッフではなく利用者によるほうが効果のある場合もあった。「ケアされていた人

も参与するケア」という新たなケアの可能性と、それらを取り巻く環境について指摘した。多様な年齢層が利用する共生ケアは子どもの「成長」を感じさせながら高齢者の「老化」に寄り添い、他者を他者と意識しながらも施設内部では高齢者も、障害者・児も、子どもも同じ仲間として認識することが、心配りにつながり、手伝いをして世話をし、そしてケアにつなげられていく様が垣間見えた。交流との着眼点とは別に、異世代が共存する時間の流れにもケア拠点のあり方がみえるのだと言えよう。